

# 画工と幽霊

岡本綺堂

青空文庫



千八百八十四年、英国倫ロンドン敦スウェーデン発刊の某雑誌に「最も奇なる、実に驚くべき怪談」と題して、頗すこぶる小説的の一種の妖怪談を掲載し、この世界の上には人間の想像すべからざる秘密又は不思議が存在しているに相違ない、これが即ち其その最も信ずべき有力の証拠であると称して、その妖怪を実地に見届けた本人（画工エリック）の談話を其そのまま筆記してある。原文は余よほど長いものであるから、今その要を摘つまんで左さに紹介する。で、その中に私わたしとあるのは、即ち其その目撃者たる画工自身の事だ。

今年の七月下旬、私は某友人あるの紹介で、貴族エル何某なにがしの別荘

へ避暑かたがた遊びに行つた事がある、その別荘は倫敦ロンドンの街から九哩マイルばかり距れた所にあるが、中々手広い立派な邸宅やしきで、何さま由緒ある貴族の別荘らしく見えた。で、私が名刺を出して来意を通じると、別荘の番人が取あえず私を奥へ案内して、「あなたが御出の事は已すでに主人しゅじんの方から沙汰がございました、就つぎましては此この通りの田舎でございませが、悠々ゆるゆる御逗留なすつて下さいまし」と、大層鄭重ていちょう ちゆうに接つて呉れたので、私も非常に満足して、主人公はお出いでになつてゐるのかと尋ねると、「イエまだお出いでにはなりません、当月末すえにはお出いでなさるに違ちがありません」との事。それから晚餐の御馳走になつて、奥の間の最上等の座敷へ案内されて、ここを私の居間と定められたが、こんな立派な広いお

座敷に寝るのは実に今夜が嘯はじめて矢だ、併しかし後あとで考えるとこのお座敷が一向に有難くない、思い出しても慄然ぞっとするお座敷であったのだ。

神ならぬ身の私は、ただ何が無しに愉快で満足で、十分に手足を伸のばして楽々と眠ねむりに就いたのが夜の十一時頃、それから一寝入ひとねいりして眼が醒めると、何だか頭が重いような、呼吸いき苦しいような、何とも云われぬ切ない心持がするので、若もしや瓦斯ガスの螺旋ねじでも弛ゆるんでいるのではあるまいかと、取とりあえず寝台ねだいを降りて座敷の瓦斯ガスを検査したが、螺旋には更に別条なく、また他たから瓦斯ガスの洩もれるような様子もない、けれども、何分なにぶんにも呼吸いきが詰まるような心持で、終局しまいには眼くが眩くらんで来たから、兎とにかく一方の硝子窓ガラスをあけ

て、それから半身はんしんを外に出して、先まずほつと一息ついた。今夜

は月のない晩であるが、大空には無数の星のかげ冴えて、その星ほ

しあかり

明あかりで庭の景色もおぼろに見える、昼は左さのみとも思わなかつ

たが、今見ると実に驚くばかりの広い庭で、植うえこみ込の立木は宛まるで

小さな森のように黒く繁茂しげつているが、今夜はそよとの風も吹か

ず、庭にあるほどの草も木も静しずかに眠つて、葉末はづえを翻こぼるる夜露の音

も聞きこえるばかり、いかにも閑静しずかな夜であつた。併しかし私はただ閑静しずか

だと思つたばかりで、別に寂しいとも怖いとも思わず、斯こういう

夜の景色は確たしかに一つの画題になると、只ひたすら管にわが職業にのみ心

を傾けて、余念もなく庭を眺めていたが、やがて気が注ついて窓を

鎖とじ、再び寝台ねだいの上に横になると、柱時計あたかが恰も二時を告げた。

室外の空気に頭を晒さらしていた所せい為か、重かつた頭も大分に軽く清すがしくなつて、胸も余よほど寛くつろいで来たから、そのまま枕まくらに就ついて一ひ霎と時ときうとうとと眠ねつたかと思おもう間もなく、座敷ざしきの中うちが俄にわかにぱつと明るくなつたので、私も驚おどいて飛び起おきる、その途端とたんに何処どこから来たか知らぬが一個ひとりの人かげが、この広い座敷の隅すみの方からふらふらと現あらわれ出た。

これには私わたしで無くとも驚おどくだろう、不思議の光、怪しの人影、これは抑おさも何事なにごとであろうと、私は再び床とこの上に俯伏うつぶして、窺ひそかに其その怪しあやしの者の挙動きょどうを窺のぞっていると、光はますます明るくなつて、人は次第しだいに窓の方まはへ歩あみ寄よる、其その人は女おんな、正ましく三十前後まの女、加か之しも眼眩まばゆきばかりに美しく着飾かざつた貴婦人きふじんで、するすると窓の

側へ立寄つて、何か物を投出すような手真似をしたが、窓は先刻私が確に鎖じたのだから、逆も自然に開く筈はない。で、其婦人は如何にも忌々しそうな、悶つたそうな、癩に障ると云うような風情で、身を斜めにして私の方をジロリと睨んだ顔、取立てて美人と賞讃すほどではないが、確に十人並以上の容貌で、誠に品の好い高尚い顔。けれども、その眼と眉の間に一種形容の出来ぬ凄味を帯でいて、所謂殺気を含んでいと云うのである。う、その凄い怖い眼でジロリと睨まれた一瞬間の怖さ恐しさ、私は思わず気が遠くなつて、寝台の上に顔を押付けた。と思う中に、光は忽ち消えて座敷は再び旧の闇、彼の恐しい婦人の姿も共に消えて了つた、私は転げるように寝台から飛降りて、盲探りに



マツチ燧木を探り把つて、慌てて座敷の瓦斯に火を点し、室内昼の如く  
 に照させて四辺隈なく穿索したが固より何物を見出そう筈もなく、  
 どうき動悸の波うつ胸を抱えて、私は霎時夢のように佇立んでいたが、  
 この夜中に未だ馴染も薄い番人を呼び起すのも如何と、その夜  
 は其のままにして再び寝台へ登ったが、彼の怖い顔がまだ眼の  
 前に彷彿いて、迎も寝られる筈がない、ただ怖い怖いと思ひなが  
 ら一刻千秋の思で其夜を明した。と、斯ういうと、諸君は定めて  
 臆病な奴だ、弱虫だと御嘲笑なさるだろうが、私も職業であるか  
 ら此れまでに種々の恐しい凶を見た、悪魔の凶も見た、鬼の凶  
 も見た、併し今夜のような凄しい恐しい女の顔には曾て出逢つた例  
 がない、唯見れば尋常一様の貴婦人で、別に何の不思議もな

いが、扱さてその顔に一種の凄味を帯びていて、迎とても正面から仰あおぎ視みるべからざる恐しい顔で、大抵の婦人小児は正氣を失うこと保うけあ証いだ。

扱さてその翌朝になると、番人夫婦が甲斐甲斐しく立たちはたら働いいて、朝飯の卓テーブル子にも種いろいろ々の御馳走が出る、その際、昨夜の一件をはな嘶なし出そうかと、幾たびか口の端さきまで出かかったが、フト私の胸うかにうか込んだのは、若もしや夢ではなかつたかと云う一種の疑うたが惑いで、迂う闊かつに詰つまらぬ事を云い出して、飛とんだお笑い種ぐさになるのも残念だと、其その日は何事も云わずに了しまつたが、何どう考くえても夢ではない、確たしかに実際に見届けたに違しかいない、併し実際にそんな事のある筈がない、恐らくは夢であろう、イヤ事実に相違ないと、半信半疑に

長い日を暮して、今日もまたくら闇き夜となつた、夢か、事実か、その真偽を決するのは今夜にあると、私は宵からねだい寢台に登つたが、眼は冴えて神経は鋭く、そよとの風にも胸がおど跳つてとて迎も寝入られる筈がない、その中うちに段々、夜も更ふけてあたか恰も午前二時、即ち昨夜とおなじ刻限になつたから、汝おのれ妖怪変化御ござんなれ、今夜こそは其その正体を見とどけて、あわよ好くひつとらば引ばけ捉おえて化の皮を剥はいで呉くれようと、手ぐすね引いて待まちかま構かまえていると、神経の所せ為いか知らぬが今夜も何だか頭の重いような、胸の切ないような、云うに云われぬ嫌な気持になつて、思はんしんわず半おこ身おこを起おこそうとする折こそあれ、闇くらい、闇くらい、真ま闇くらな斯この一室にわかが俄にわかにはつと薄明はくめいるくなつてあたか恰おほろづきよもおほろづきよ朧月夜おぼろづきよのよう、扱さてはいよいよ来たりと身構みはえして眼みはをみは

る間もなく、室の隅から忽ち彼の貴婦人の姿が迷うが如くに現わ  
 れた。ハツと思う中に、貴婦人は昨夜の如く、長い裾を曳いてす  
 るすると窓の口へ立寄つて、両肱を張つて少し屈むかと思え  
 たが、何でも全身の力を両腕に籠めて、或物を窓の外へ推出し  
 突出すような身のこなし、それが済むと忽ち身を捻向けて私の顔  
 をジロリ、睨まれたが最期、私はおぼえず悚然として最初の勇氣  
 も何処へやら、ただ俯向いて呼吸を呑んでいると、貴婦人は冷か  
 に笑つて又彼方へ向直るかと思ふ間もなく、室内は再び闇くな  
 がつて其の姿も消え失せた、夢でない、幻影でない、今夜とい  
 う今夜は確に其の实地を見届けたのだ、あれが俗にいう魔とか幽霊  
 とか云うものであらう。

もうこの上は我慢も遠慮もない、その翌朝例の如く食事を初めた時に、私は番人夫婦に向つて、「お前さん達は長年この別荘に雇われていなさるのかね」と、何気なく尋ねると、夫の方は白髪頭を撫でて、「はい、私しは当年五十七になります、丁度四十一の年からここに雇われて居ります」と云う。私も怪談を探り出す端緒に困つたが、更に左あらぬ体で、「併しお前さん達は夫婦差向いで、こんな広い別荘に十何年も住んでいて、寂しいとか怖いとか思うような事はありませんかね」と、それとは無しに探りを入れたが、相手は更に張合のない調子で、「別に何とも思いません、斯うして数年住馴れて居りますと、別に寂しい事も怖い事ありません」と、笑っている。けれども、怖い

事や怪しい事が無い筈はない、現に私が二晩もつづけて彼の妖怪を見届けたのだ。で、更に問を替て、「私の拝借しているアノお座敷は中々立派ですね、お庭もお広いですね、実は昨夜、夜半に眼が醒めたのでアノ窓をあけて庭を眺めて居ましたが、夜の景色は又格別ですね」と、そろそろ本題に入りかかると、番人の女房が首肯いて、「お庭は随分お広うござんすから、夜の景色は中々宜しゅうございましょう、併し貴方、アノ窓は普通の窓より余ほど低く出来ていますから、馴れない方がウツカリ凭懸ると、前の方に滑る事がありますよ。これまでも随分ウツカリして転げ墜ちた方が幾人もあります」と聞きもあえず、私は慌てて、「それ、それは不意に墜ちるので、シテそれは夜ですか、昼ですか」

と尋ねると、女房は打案じて、「サア何時と限った事もありませんが、マア闇い時の方が多いいようですね、ツマリ闇いから其様な疎匆をするのでしようよ」と澄している。けれども、それは闇い為ばかりでない、確に他に一種の魔力が手伝うに相違ない。で、私は重ねて、「で、其の墜ちた人は何うしました、死んだ人もありましたか」相手は頭を振つて、「イエ死だ方はありません、ただ怪我をする位の事です、併し今から百年ほど以前にこのお邸の若様が、アノ窓から真逆様に転げ墜ちて、頸の骨を挫いて死んだ事があるさうです」と、聞く事々に私はおのずから胸の跳るを覚えたが、猶も透さず、「それで何日頃から其様な事が始つたのですね」と問えば、番人は小首をかたげて、「サア何日頃からか

知りませんが、何でも其その若様が窓から墜おちて死しんだ後のち、その阿おふく母ろ様もブラブラ病やまいで、間もなく御死亡おなくなりになったのです。で、その後も兎とかくに其その窓から墜おちる人があるので、当時いまの殿様も酷ひどくそれを気にかけて、近ちかぢか々うちの中にアノ窓を取とりこわ毀たてなして建直たてなおすとか云いつてお在いでなさるそうですよ」と、何か仔細しじゆのありさうな嘸はなし。そう聞きいては猶ななお々きき聞逃のがす訳には往ゆかぬ、私は猶なもおたみみけて、「それじゃア其その窓が崇たかるのだね」相手は笑わらつて、「真逆まさかさういふ訳でもありますまいよ、併しかし其その若様が変死へんじした事ことについては、いろいろの評判ひはんがあるのです」

嘸はなしはいよいよ本題ほんだいに入いつて来たから、私もいよいよ熱心ねっしんに、「え、それは何どういふ理屈りくつだね、何どんな評判ひはんがあるのだね」と、



思わ<sup>のりだ</sup>ず身を乗出して相手の顔を覗き込むと、番人は顔を皺<sup>しか</sup>めて少  
 しく低<sup>こごえ</sup>声になり、「これは内<sup>ないしやう</sup>證<sup>はなし</sup>のお嘶<sup>はなし</sup>ですがね、勿<sup>もちろん</sup>論<sup>ろん</sup>百年  
 も以前<sup>まえ</sup>の事ですから、誰も実地を見たという者もなく、ほんの当<sup>あ</sup>  
 てず<sup>いりよう</sup>いりよう推<sup>ひ</sup>量<sup>おじいさま</sup>に過ぎないのですが、昔からの伝<sup>い</sup>説<sup>い</sup>に依ると、当<sup>いま</sup>時<sup>ま</sup>  
 の殿様の曾祖父様の時代の嘶<sup>はなし</sup>で、その奥様が二歳<sup>ふたつ</sup>になる若様を  
 残<sup>おなくなり</sup>して御死亡になりました、ソコで間もなく他<sup>た</sup>から後<sup>にどぞい</sup>妻をお  
 貰<sup>はら</sup>いになつて、その二度目の奥様のお腹にも男のお見様が出来た  
 のです。けれども、其<sup>そ</sup>の奥様は大層お優しい方で、わが産<sup>うみ</sup>の児よ  
 りも継子<sup>ままこ</sup>の御総領の方を大層可愛がつて、俗<sup>よ</sup>にいう継<sup>ままはは</sup>母<sup>はは</sup>根性な  
 どと云う事は少しもない、誠に気質<sup>きだて</sup>の美しい方でした。ところが、  
 其<sup>そ</sup>の御総領の若様が五歳<sup>いつつ</sup>になつた時、ある日アノ窓<sup>そば</sup>の側で遊んで

いる中、<sup>うち</sup>どうした機会か其の窓の口から真逆さまに転げ墜ちて、  
敷石で頸の骨を強く撲ったから堪りません、其のまま二言といわ  
ず即死して了ったのです。サアそこですね、それに就いて種々  
の風説がある。と云うのは、彼の継母の奥様が背後から不意に其  
の若様を突落したに相違ないと云う評判で、一時は随分面倒で  
したが、何をいうにも証拠のない事、とうとうそれなりに済んで  
了ったのです」と息も吐かずに饒舌るのを、私も固唾を呑んで聞  
きすま  
澄していたが、其の嘶の了るを待兼ねて、「併しそれが可怪い  
じやアないか、其の奥様は大層継子を可愛がったと云うのに、ど  
うして其んな怖しい事を巧んだのだろう」相手は私の無經驗を嘲  
けるように冷笑って「サアそこが女の浅猿さで、表面は優し

く見せかけても内心は如夜叉によやしや、総領の継子を殺して我が実子じっしを  
 相続人に据えようという怖い巧みたくがあつたに相違ないので。  
 それが一般の評判になつたので、表おもてむき向むきの罪人にこそならない  
 けれども、御親類御一門も皆その奥様を忌嫌いみきらつて、誰も快く交  
 際する者もなく、果はては本夫おつとの殿様さえも碌ろくろく々ことばに詞かを交かわさぬ位くらい。  
 で、奥様も人に顔を見られるのを厭いとつて、年中アノ座敷に閉籠とじこも  
 ったままで滅多に外へ出た事も無かつたでしたが、ツマリ自分の  
 良心に責められたのでしよう、氣病きやみのようにブラブラと寝つ起き  
 つ、凡およそ一年ばかりも経つ中うちに、ある日アノ窓の側そばまで行くと、  
 急に顔色かがわ変つてパツタリ倒れたまま死んで了しまつたそうです。心こ  
 柄ころがらとは云いながら誠にお氣の毒な事で、それから後のちは愈いよい其そ

の奥様が若様を殺したに相違ないと決定して、今まで優しい方だ、美しい奥様だと誉めた者までが、継子殺しの鬼よ、悪魔よと皆口々に罵つたという事です」と、苦々しげに物語る。以上の嘯で彼の怪しい貴婦人の正体も大抵推察された。で、そう事が解つて見ると、私は猶々怖く恐しく感じて、迎もここに長居する気がないから、其日のうちに早々ここを引払つて、再び倫敦へ逃帰る。その仔細を知らぬ番人夫婦は、余りお早いではありませんか、せめてモウ五六日、せめて殿様がお出になるまで、と詞を尽して抑留めたが、私はモウ気が気でない、無理に振切つて逃げて歸つた。

で、私の臆病には自分ながら愛想の竭きる位で、倫敦へ歸つた

後のちも、例の貴婦人の怖い顔が明けても暮れても我眼わがめに彷彿ちらついて、  
 滅多ひまに忘れる暇がない。そこで私も考えた、自分の職業は画工で  
 ある、斯かかる怪異あやしみを見て唯怖ただい怖ふるいと顫ふるえているばかりが能よでも  
 あるまい、其その怪しい形の有ありのままを筆のぼに上のぼせて、いかに其それが  
 恐おそしくあつたかと云う事を他人ひとにも示し、また自分の紀念きねんにも存  
 して置おこうと、いしくも思い立つたので、其日そのひから直ただちに画筆えいふでを  
 把とつて下図したずに取とりかかった。で、わが眼の前に絶たえず彷彿ちらつく怪あやししの  
 影かげを捉とえて、一心不乱に筆を染めた結果、何どうやら斯こうやら其その  
 真しんを写し得えて、先まず大略あらましは出しゅつ来たいした頃、丁度ちやうど私ひきちがと引違ひきちが  
 えて彼かの別荘へ避暑に出かけた貴族エル何某なにがしが、其その本邸ほんていに帰  
 ったという噂を聞いたので、先日せんじつの礼れいかたがた其その邸ていを初はじめて訪

問した。主人あるじのエルは喜んで私を応接間へ延ひいて、「過日は別荘の方へ御立寄下すつたそうでしたが、アノ通りの田舎家で碌ろくろ々お構い申しも致さんで、豪えらい失礼しました」と鄭寧ていねいな挨拶、私は酷ひどく痛み入いつて、「イヤどうも飛んだ御厄介になりました、実はモウ四五日もお邪魔をいたす筈でしたが、宅の方に急用が出来ましたので、早々にお暇いとまいたしました」と、口から出任せの口上、何にも知らぬ主人あるじは首肯うなずいて、「ハアそうでしたか、私もお跡あとから直すぐに別荘へ出かけましたが、貴方はモウお帰りになったと聞いて、甚だ失望しました、併しかし幸い今日は何なんにも用事もありませんから、ゆるゆるお嘸はなしでも伺いたいものです」と、誠に如才じよさいない接待振あつかいぶりで、私も思わずここに尻を据えて、殆ほとんど三時間ほど

も世間噺に時を移した。それから、先祖代々の肖像画をお目にか  
けようと云うので、主人あるじが先に立って奥の一室へ案内する、私も  
何なに心こころなく其その跡について行くと、貴族の家の習慣ならいとして、広  
い一室の壁に先祖代々の人々の肖像画が順序正しく懸かけ列つらねてあ  
る。で、一々これを仰あおぎ視みている中うちに、私は思わずアツと叫んだ。  
と云うのは他ほかでもない、彼かの恐おそしい貴婦人の顔が活けるが如くに  
睨にらんでいるのだ。其その恐おそしい顔、実に先夜の顔と寸分違たがわず、彼か  
の幽霊が再びここへ迷い出たかと思われ、私わたくしは我われにもあらで  
身を顛ふるわせた。その挙動が余よほど不思議に見えたのであろう、主あ  
人るじは私の顔をジロジロ視みて、「あなた、どうか為しましたか」私は  
半なかばは夢中で、「ハイあれです、確たしかにあれです、私わたくしは確たしかに見みました」

と辻褄つじつまのあわぬ返事、主人は愈いよいよ不思議そうに眉ひそを顰ひそめたが、やがて俄にわかに笑い出して、「あなた、其その人に逢あつた事がありますか。それは百年も以前まえの人です、アハハハ」と、斯こう云いわれて私も気が付いた、成なるほど其その仔細しじゆを知らぬ主人あるじが不思議に思うも道理もつともと、ここで彼かの別荘の怪談を残あらず打明うちあけると、主人あるじもどろいて面色いろを変かえて、霎しばし時は詞ことばもなかつたが、やがて大息おほいきついで、「世には不思議な事もあるものですね、実はこの婦人ついでに就つては一条の噺はなしがあるので」と、曩さきに彼かの別荘の番人が語かつた通りのむかしかたり昔むかし語かたり、それを聞きけば最早さき疑かうべくもないが、いまは百年も昔むかしの事こと、其その以来か曾かて斯ある怪あやし異みを見みた者ものもなく、現いまに十五六年来かも其その別荘べつていに住すむ番人ばんにん夫婦ふうふすらも、曾かて見みもせず聞ききもせぬ幽霊



の姿を、無関係の私が何<sup>どう</sup>して偶然に見たのであろう、加<sup>しか</sup>之も二晩もつづけて見るといふのは実に解<sup>げ</sup>し兼ねる次第で、思えば思うほど実に不思議な薄気味の悪い<sup>はなし</sup>嘶<sup>し</sup>だ。で、主人<sup>あるじ</sup>の驚愕<sup>おどろき</sup>は私よりも又一倍で、そう聞く上は最早一刻も猶予は出来ぬ、早速その窓を取<sup>とりこわ</sup>毀<sup>こわ</sup>し、時宜<sup>じき</sup>に依<sup>よ</sup>れば其の室全体を取<sup>とりこわ</sup>壊<sup>くず</sup>して了<sup>しま</sup>わねばならぬと、直<sup>すぐ</sup>に家令<sup>すく</sup>を呼んで其<sup>そ</sup>の趣<sup>おもむき</sup>を命令した。で、今頃は其<sup>そ</sup>の窓も容赦なく取<sup>とりこわ</sup>毀<sup>こわ</sup>されて、繼<sup>ま</sup>母<sup>まはは</sup>の執念<sup>しつねん</sup>も其<sup>そ</sup>の憑<sup>よ</sup>る所を失つたであらうか。

以上が画工エリックの物語で、同雑誌記者の附記する所によれば、彼<sup>か</sup>の画工の筆に成つた恐しき婦人の絵姿は此<sup>こ</sup>のほど全く出<sup>しゅっ</sup>て

来たいしたが、何さま一種云われぬ物凄おびい恐ふるしい顔である、婦人の  
 如そき、其の凶を一目見るや忽たちまちに魘おびえて顫ふるえて、其後そのご一週間ほど  
 は病床に倒れたという。で、普通の日本人の考かんがえ慮から云うと、  
 殺した方が人が化けて出るといふのは、些ちと理屈に合あわぬように  
 聞きこえるが、何分にも其そこ処が怪談、万事不可思議の所が事じじつ実譚の  
 価ねうち値であろう。

(狂生)

# 青空文庫情報

底本：「飛驒の怪談 新編 綺堂怪奇名作選」メディアアファクトリー

2008（平成20）年3月5日初版第1刷発行

初出：「文藝倶楽部」

1902（明治35）年8月号

※初出時の署名は「狂生」です。

入力：川山隆

校正：山本弘子

2010年4月19日作成

2013年8月11日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 画工と幽霊

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>